様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０２６０７

研究課題名（和文）学習者の発達段階に応じた「伝統的な言語文化」としての神話の教材化と指導方法の開発

研究課題名（英文）Development of teaching materials and teaching method of Japanese myths as " traditional language culture" based on learners developmental stage.

研究代表者
小川　雅子（OGAWA, Masako）

山形大学・地域教育文化学部・名誉教授

研究者番号：４０１９４４５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：　小学校国語教科書における神話教材「いなばのしろうさぎ」が、どれも戦前と同様に神話性を削除した動物譚・教訓譚に書き替えられている問題を明らかにした。教訓の言葉がない神話の特性が否定されている原因は国語教育における神話の概念にあると考えて、現代神話学・『古事記』の解釈と受容史の研究成果等に基づいて、グローバルな観点から国語教育における神話の概念を再構築した。さらに、小学生から大学生までを対象とした調査を通して、神話の教材化と指導について三つの観点を指摘した。それは、世界の神話と比較すること・神話を教訓話に書き替えないこと・原典の内容に対する学習者の主体的な読みを尊重することである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的意義は、教訓的な言葉のない神話を現代の価値観から教訓話に書き替えて教材化する国語教育の神話観に対して、『古事記』神話をめぐる現代神話学・文学研究・受容史研究等の研究成果を援用して新たな神話観を提示し、学習指導要領における「知識及び技能」に即した神話の教材化と指導方法を小学生から大学生を対象とした調査を通して実証的に明らかに示したことである。
　社会的意義は、「我が国の伝統的な言語文化」という神話の位置づけを、グローバルな観点に立って世界の多様な文化の根源を知る「人類の伝統的な言語文化」として、戦後教育に新たな神話の概念を再構築したことである。

研究成果の概要（英文）：　I revealed that all of the mythological teaching materials "Inaba no Shirousagi" in elementary school Japanese textbooks have been rewritten into animal stories and didactic stories rather than myths, as they were before the war. I thought that the cause of rewriting a myth that does not have a word of lessons into a didactic story is the concept of myth in Japanese language education. Therefore, based on the results of research on the interpretation and reception history of modern mythology and the "Kojiki", I have reconstructed the concept of mythology in Japanese language education from a global perspective. Furthermore, through a survey of elementary school students to university students, three perspectives were pointed out regarding the teaching and teaching of mythology. It is about comparing with the myths of the world, not rewriting myths into didactic stories, and respecting learners' independent readings.

研究分野：国語科教育

キーワード：我が国の伝統的な言語文化　古典教育　神話教材　いなばのしろうさぎ　国語教育　『古事記』神話　現代神話学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）　神話は学習指導要領で我が国の「伝統的な言語文化」に位置づけられているが、現行小学校国語教科書（教育出版・光村図書・東京書籍・三省堂）の「いなばのしろうさぎ」は、どれも原典である『古事記』から神話性を削除して原典にはない言葉を加えた再話である。現代的価値観から書き替えられた教材が、伝統的な言語文化としての神話教材といえるか疑問である。

（２）　学習指導要領において神話は、他の物語と同様に「場面の様子や登場人物の行動を中心に想像を広げながら読む」ことがねらいになっている。国語教育では、戦後半世紀以上にわたって教科書に神話教材が無く研究の積み重ねもなかったので、神話というジャンルの特性を生かした教材化や指導方法が明確になっていない。

２．研究の目的

（１）　小学校国語教科書における神話教材がどれも戦前と同様の再話である現状に対して、神話というジャンルの特性を生かし学習者の発達段階に応じる教材化と指導方法を開発する。

（２）　学習指導要領で「我が国の伝統的な言語文化」と位置づけられた神話について、『古事記』をめぐる多様な研究成果を整理して、グローバルな観点から国語教育における新たな「神話の概念」を再構築する。

３．研究の方法

（１）　現行小学校国語教科書（４社）の「いなばのしろうさぎ」に関して、『古事記』研究書・一般図書の再話・海外の類話等について調査する。さらに、小学生の読みと、教材研究としての大学生の読みの実態から、神話教材の書き替えが学習者の読みに与える問題について考察する。

（２）　戦後の古典教育における神話の位置づけの問題を踏まえて、近年の様々な神話研究の成果を考察して現代における神話の意義を明らかにし、グローバルな観点から国語教育の神話の概念を再構築して、神話というジャンルの特性を生かした教材化と指導の新たな方向性を示す。

４．研究成果

（１）　教材文「いなばのしろうさぎ」をめぐって、戦前の国定教科書・平成 27 年発行小学校国語教科書（4 社）・『古事記』「稲羽の素菟」のそれぞれを比較検討した結果、次のことが明らかになった。

①　「いなばのしろうさぎ」の教材文は、戦前の国定教科書でも現行教科書でも、神話性を削除した動物譚・教訓譚として書き替えられている。原典は大国主神話の一部であるが、兎が主人公の動物譚に書き替えられた再話では、八上姫の存在は省略されている。単元名や冒頭文では、神話ではなく、「昔話」であることが示されている。

②　本来、教訓的言葉のない「神話」を現代的価値観から教訓譚に書き替えて教材化しているのは、神話というジャンルの特性を否定していることになる。「伝統的な言語文化」としての神話は隠され、学習者には異なる内容が教えられている。

③　八上姫を登場させている 2 社の再話では、「きれいなおひめさま」と原典にない言葉を加えて「人」としての存在をイメージさせている。さらに、4 社の再話はどれも、大国主には「やさしい・しんせつな・かしこい」等、八十神には「いじわる」等の性格を表す言葉を加えて、「人」としてのイメージとともに善悪の対比構造を示している。

④　『古事記』「稲羽の素菟」には、「和邇」「素菟」等の解釈に諸説あり、それらについての問題点を明らかにした。

⑤　「神話」の定義は世界的に見ても多様に存在することを示した。その上で、記紀神話のように系統的な神話が記録されたことは世界的にみても希であるという研究成果を確認した。

（２）　「いなばのしろうさぎ」の教材をめぐって、真福寺本『古事記』の表記、本居宣長『古事記伝』の注釈、研究書や一般図書の再話表現について比較検討した。その結果、次のようなことが明らかになった。

①　本居宣長『古事記伝』では、「稲羽の素菟」を大国主神話として読んでいる。
　・八上姫を「八上比売神」と書いている。
　・本来ならば、まず八十神が兎に裸で伏せている理由を問い、兎の答えが書かれるべきところを、ここでは書かずに、次に来る大穴牟遅神が問い、兎が答えるという展開になっているのは、主人公が大穴牟遅神だからであると述べている。
　・兎神の言葉通りになったことについて、「まことに神なり」と書いている。

②　注釈書の訓みに大きな違いは無いが、年代が下がるとともに敬語表現が少なくなっている。

③　現代語訳・口語訳の内容は原典に即している。訳者による文体の違いがある。
④　絵本を含めた様々な再話では、原典から削除されている表現がある。
・八上姫の存在が書かれていない再話がある。
・「兎神」の記述がない再話がほとんどである。しかし、2000 年以降の再話（絵本）では、「兎神」の記述がある作品が増えている傾向がある。
・兎の予言が書かれていない再話があるが、「兎神」と兎の予言はセットではない。兎神は削除されていても、兎の予言は書かれている作品が多い。
⑤　絵本を含めた様々な再話では、原典にない言葉が加えられている。
・八上姫の容姿の美しさ・八十神の意地悪さ・大国主の優しい性格や心理描写等。
・八十神と大国主の日常的な関係。（「お兄さんの神さまたちはいつもひどいいじわるをしていました。」等）
・和邇と兎の会話・兎に対する八十神の意地悪な言葉や表情・大国主の兎に対するいたわりの言葉・兎が和邇の上を渡る場面のオノマトペや反復表現等。
・原典にない鷹、亀の登場。
・『日本書紀』『風土記』『和名抄』『塵袋』などの記述から、兎が隠岐島にいた理由・大国主が傷を治す知識を持っていたこと・兎は八上姫の使いだったこと等。
・兎に向かって「悪いことをすれば、必ず自分にかえってくる」と諭す言葉。これが書かれている作品では「兎神」も「兎の予言」も削除されて、人間世界の教訓が強調されている。
・末尾を八上姫とのハッピーエンドとする等、原典の内容を書き替える。
⑥　教科書教材における原典の書き替えは一般図書にも見られた。しかし、一般図書における近年の再話では、「原典を書き替えない」「ジェンダー表現を付け加えない」「意地悪な神と優しい神の対比ではなく文学研究の成果を反映する」等の傾向がある。

（3）　「稲羽の素兎」は大国主神話の一部であるが、戦前も戦後もこの部分だけが動物譚・教訓譚として書き替えられて教材化されていた。それは、この話が東南アジア地域から伝えられた動物譚の影響を受けているためであると言われている。

そこで、インドネシア民話「いたずらカンチル」（カンチルはまめじかのこと）とベトナム民話「うさぎの計略」を検討した。どちらも、まめじかや兎などの小動物がワニを騙して川を渡った話であり、ワニを騙した小動物の「知恵」が称賛されている。「稲羽の素兎」と違って、ワニがカンチルや兎に仕返しをする展開はない。ワニは、ただ悔しがるだけである。

「いたずらカンチル」では、カンチルはワニ・トラ・クマンバチを騙している。「いたずらカンチル」を再話した「りこうなシカ」では、ワニ・トラは同じだが、クマンバチの代わりにカタツムリが登場している。そして、兎が自分よりも弱いカタツムリを馬鹿にした「うぬぼれや」の認識になった時、カタツムリに騙されるという教訓話になっている。

「いなばのしろうさぎ」の類話をめぐって価値観や教訓内容の違いが明確であることから、世界の神話を視野に入れて日本神話を受容する観点からは、異文化理解とともに、我が国の伝統的な言語文化としての神話の新しい姿が見えて来ることが明らかになった。

（4）　小学 2 年生を対象とした大国主神話の教材化と実践・教材研究としての大学生の読みの実態から、次のことが明らかになった。
①　大国主神話を原典に即した紙芝居として教材化し、小学 2 年生に実演したところ、児童は一連の大国主神話の流れを理解できたことが確認された。さらに、鼠の言葉を「暗号」と読み取る児童や、鼠に助けられた事と兎を助けたことの因果関係について述べる児童が複数いて、2 年生の解釈力のすぐれた一面も明らかになった。

なお、焼け石を抱く場面と荒れ野で火に囲まれる場面を混同した児童がいたことは、紙芝居の絵をめぐる検討課題になった。
②　教材文を読んだ大学生と原文を読んだ大学生の感想の違いが明らかになった。
・教材文を読んだ学生は低学年向けの教訓話として内容を分析しているが、原文を読んだ学生は自分自身の認識に関わる問題として内容を分析している。
・教材文を読んだ学生は「兎やわにがしゃべること」「大国主の言う通りにして兎の毛が生えたこと」などに神話性を感じているが、原文を読んだ学生は兎の認識の変化や予言・大国主の認識を異次元としてそこに神話性を感じている。
・教材文を読んだ学生は神話に八十神のような意地悪な神がいることに疑問を感じているが、原文を読んだ学生は八十神の認識と自分の認識は同じであると自身の認識を検討している。
・教材文を読んだ学生は「八十神=意地悪、大国主=やさしい」という枠組みの教訓話と理解して「神話は教訓話なのだ」という学びを書いているが、原文を読んだ学生は神話の比喩性に興味を持って八十神・兎・和邇・大国主のそれぞれの認識を自分自身の認識と関連させて個人によって異なる多様な解釈を示している。

③　教材文と原文を読み比べた学生の感想には、次のような内容のものがあった。
・絶対正しいと思っていた教科書教材が原典の話を書き替えた再話である現実を知った驚き。
・小学校低学年の児童に対する書き替えに対する理解。
・原典の内容を書き替えることへの疑問や意見。
・教材研究において教師が原典を確認する必要性。
・教材開発の難しさ。
・学習者の発達段階に応じた指導を考える教師の視点。
④　児童や大学生の読みの実態調査から、教科書教材の再話作品としての価値とは別に、教材文としては原典に即した内容であることが重要な条件であると結論づけた。さらに、世界の神話や民話等も視野に入れて、我が国の伝統的な言語文化としての神話の教材化においては、「グローバルな観点」と「発達段階に応じて比喩を読む観点」の必要性を指摘した。

（5）　神話教材が神話性を削除して書き替えられている問題の原因を探るため、終戦直後からの古典教育における神話の扱いについて考察した。戦後の国語教育においては、長い間神話教材もなく指導に関する研究もなかったことから、国語教育における神話の位置づけ・教材化・指導方法について議論し、今後のグローバルな国語教育における新たな位置づけを定めることが喫緊の課題であると考えた。その経緯を以下のように整理した。
①　終戦直後の古典教育状況については、時枝誠記が「日本古典は、戦争犯罪者と同様に見られ、また扱はれてきたことは事実である。」と述べているように、昭和 22 年版学習指導要領（試案）では、「中学校の国語教育は、古典教育から解放されなければならない。」と位置づけられた。その状況を、坂本富貴雄は「国語教科書にかなりの割合で載せられていた古典教材はたちまち一掃され、…中略…古典蔑視の傾向さえ現れてきた。」と述べている。
　その後、昭和 33 年版学習指導要領では古典教育を充実させる方向性が明確に示されたが、高等学校であげられた古文の材料に「記紀歌謡」はあるが「神話」はない。古典教育は復活したが、「神話」については議論も実践も無いまま教科書から神話教材は消えていった。
　平成 20 年版学習指導要領に我が国の「伝統的な言語文化」として「神話」が位置づけられたが、教科書には戦前と同じように、物譚・教訓譚として再話された「いなばのしろうさぎ」が教材化された。原典の神話性を削除して現代的な価値観によって書き替えられた教材は、「伝統的な言語文化」としての神話を否定していると考える。
②　時枝が「日本古典は戦争犯罪者と同様に見られ、また、扱はれてきた」と述べた日本古典の中核にあったのは記紀神話である。その神話が学習指導要領に位置づけられたのであるから、まず、記紀神話の位置づけが再検討されなければならない。すなわち、記紀神話に対するパラダイムの転換が必要である。三浦佑之は「記紀神話は天皇家を称賛するために書かれた歴史だとする認識を捨てさる」ことからの読みを提唱している。また、日本神話を構成するモチーフはほとんどが世界の神話と類似性をもっていることも明らかになっている。したがって、今後グローバル化されていく国語教育においては、世界の神話を視野に入れて異文化への理解を深めながら日本神話を新たに解釈していくことが必要であると考える。

（6）　戦後の国語教育に一貫している「神話の概念」に対して、近年の神話研究成果を援用して新たな「神話の概念」を構築した。
①　河合隼雄は「第二次世界大戦のときに軍閥によって日本神話が利用され、そのために思春期のときに抱いた嫌悪感は非常に強く、日本神話に関心をもつことなどあり得ないと思っていた。」と述べている。また、丸山真男は「神話を知らぬことの危険」と「対立するものを消してはいけない」ことを主張している。筆者の立場は、それぞれの時代の解釈を「位置づける」ことにある。そのために、戦後の神話学研究・『古事記』の文学研究・『古事記』受容史研究の成果を援用しながら、国語教育における新たな「神話の概念」を構築した。
②　現代神話学の研究成果から導かれる『古事記』神話の概念をまとめた。
・ユングの「集合無意識と元型」の視点から、河合隼雄は日本神話の「中空構造」を指摘した。
・イェンゼンの「神話と文化の関連」の視点から、農業や養蚕業をめぐる日本神話の内容が世界の神話と共通していることが明らかに示された。
・デュメジルの「比較神話学」の視点から、吉田敦彦は日本神話にも世界の神話と共通する「三区分イデオロギー」の構造があることを指摘した。
・レヴィ＝ストロースの「構造分析」の視点から、『古事記』上巻（神話）の内容は中巻の内容と対応していることが指摘された。
③　『古事記』神話の受容史研究では、明治時代以降様々な視点が整理されている。斎藤英喜は、マルクス主義歴史学に基づく解釈を展開した石母田正、構造主義の神話分析方法で独自に読み解いた西郷信綱、翁の口調の口語訳や出雲世界への注目を示している三浦佑之、記紀神話というイデオロギーを批判した神野志隆光らの研究を辿りながら、『古事記』神話は常に読み替

えられている現実を指摘している。

④　近年の『古事記』神話をめぐる研究成果を援用して、国語教育における神話の概念は新たに、グローバルな観点と、常に新たな解釈を創出する観点を柱としなければならない。倉野憲司は、『古事記』の「現代的意義と現代的解釈」の違いを述べている。両者は学習指導要領における「伝統的な言語文化」の継承と発展を支えるものである。河合隼雄は日本神話に対する「非常に強い嫌悪感」を抱いていたが、実際に読んでみて、「日本本神話を基にユング派分析家の資格取得論文を書こう」と決心した。すなわち、日本神話に対する強い拒否感は、原典を知らないまま与えられていた概念だった。これは一人河合隼雄に限らない。原典を知らないまま嫌悪感や否定感が国語教育における「神話の概念」として長く共有されてきた。

教科書教材は、多義的な神話を一義的な教訓話に書き替えているが、学習者から多義的な神話に出会う権利を奪ってはならない。「神話には教訓の言葉がない」という特性を尊重してこそ、「我が国の伝統的な言語文化」の学習として意味がある。

（7）　神話理解の難しさには、主に「神名の難しさ」「神々の言動だけで話が展開していく難しさ」「比喩を読む難しさ」がある。さらに指導においては、学習者の発達段階に応じる必要がある。これらの課題に対して具体的な教材化と実践の工夫の有効性を実証的に示して、その観点の重要性を明らかにした。

①　学習者の発達段階に応じる創作紙芝居の柔軟性と学習者の多様な受容

・紙芝居の絵は、幼児から大人まで、なじみのない神話への理解とイメージ化を助ける。難しい神名も具体的な姿と結びつけることができるので理解しやすく、原文にある古語の意味を詳しく説明しなくても視覚的に理解できる。

・創作紙芝居の場合は、対象者の発達段階に応じて、文章や視聴時間を自由に変更して実演することができる。

・視聴の途中で、対象者の感想や意見、質問などを聞きながら話を進めることができる。

・子供から大人までの多様な対象者は、初めて知る神話の内容に驚きと興味をもって受容したことが分かった。

②　世界の神話と比較する教材から広がる異文化の根源への理解

高校生には、ギリシア神話と日本神話を比較した教材を作成して講義をした。高校生の感想は、「神話というジャンルが存在していることの驚き」「神話の内容の面白さと驚き」「神話について得た新たな知識」「神話に教訓の言葉がない驚き」「神について考えたこと」「世界の神話との比較の面白さ」「疑問に思ったこと」等、多岐にわたっていた。また、世界の神話について自ら調べる活動を取り入れた大学生への授業では、共通性と違いの双方に驚きが示された。神話に表れる発想や価値観の違いはそれぞれの文化の根源でもある。世界の多様な文化の根源に着目して理解を深める教材と指導の有効性が示された。

③　神話の比喩を解釈する学習者の創造的な読みの支援

大学生を対象に、『古事記』神話の「比喩を読む」ことをねらいとして、話合い活動を取り入れながら各自の解釈を重ねていった。その結果、個々の学生は自身の問題と結びつけた解釈を独自に多様に行い、神話の多義性を共有した。教訓の言葉のない神話から、学生が自ら教訓を読み取る解釈もあり、原典の内容を学習者が主体的に解釈して豊かな読みを創造し、自らの生きる力としていることが明らかになった。

④　学習指導要領において、継承と創造が求められている「我が国の伝統的な言語文化」は、「知識及び技能」に位置づけられている。神話の「教材化において重要なことは原典を尊重した教材化の工夫」（継承）であり、「指導において重要なことは学習者の発達段階に応じた主体的な読みの支援」（創造）であると考える。

主要参考文献

大野晋編（1969）『本居宣長全集第九巻』筑摩書房／大脇由紀子（2010）『徹底比較日本神話とギリシア神話』明治書院／河合隼雄・湯浅泰雄・吉田敦彦（1996）『日本神話の思想スサノヲ論』ミネルヴァ書房／河合隼雄（2003）『神話と日本人の心』岩波書店／河合隼雄（2009）『日本神話と心の構造』岩波書店／神野志隆光（1999）『古事記と日本書紀』講談社現代新書／『国語教育学研究の創成と展開』編集委員会編（2015）『国語教育学研究の創成と展開』溪水社／西郷信綱（1975）『古事記注釈第一巻』平凡社／斎藤英喜（2012）『古事記はいかに読まれてきたか』吉川弘文館／斎藤英喜（2015）『神話・伝承学への招待』思文閣／時枝誠記（1948．4）「国語教育における古典教材の意義について」『国語と国文学』第 25 巻第 4 号／時枝誠記（1956．4）「古典教育の意義とその問題点」『国語と国文学』第 33 巻第 4 号／中野幸一・榎本千香（2014）『ちりめん本印影集成日本昔噺輯第 1 冊英語版』勉誠出版／山室静（1995）『ギリシャ神話』社会思想社／吉田敦彦・松村一男（1987）『神話学とは何か』有斐閣／吉田敦彦（2008）『日本の神話』青土社／渡辺春美（2016）『古典教育の創造―授業の活性化を求めてー』溪水社、他。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 小川 雅子	４．巻 18
２．論文標題 国語教育における「神話の概念」の検討	５．発行年 2022年
３．雑誌名 山形大学紀要．教育科学 = BULLETIN OF YAMAGATA UNIVERSITY．EDUCATIONAL SCIENCE	６．最初と最後の頁 1～17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小川雅子	４．巻 585
２．論文標題 原典の姿を尋ねる	５．発行年 2021年
３．雑誌名 月刊国語教育研究	６．最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小川雅子	４．巻 17巻4号
２．論文標題 小学校国語教科書における神話教材の書き替えをめぐる問題ー「いなばのしろうさぎ」を中心にー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 山形大学紀要（教育科学）	６．最初と最後の頁 25．46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小川雅子・中村久美子	４．巻 16
２．論文標題 小学生の読書興味の実態と国語科の課題ー学校図書館における貸出図書の調査からー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 山形大学教職・教育実践研究	６．最初と最後の頁 1．12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小川雅子・清野真美子	４．巻 15
２．論文標題 国語教科書における再話教材の検討	５．発行年 2020年
３．雑誌名 山形大学教職・教育実践研究	６．最初と最後の頁 1，10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関